

第二期 第八十五号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトーブ

学びあう人々のために

2023. 08. 10 定有堂書店 発行

地の塩

本棚義勇軍

自分の「棚」を眺める

小さきものの大きさ

本を作る側から (5)

汽水のほとりから (29)

人民食堂の夜 (上)

読書感想文心得

鳥取あれこれ その八十四

定有堂書店のない鳥取で

甘くて冷たくてつるつるしたもの食べたい

先生のツラ

…… 編集後記

ムラカミヒロミ

内田 克彦

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア

奈良 敏行

三砂 慶明

岩田 直樹

木元 健二

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎



地の塩

奈良 敏行

(定有堂 主人)

本屋でない人生なんて(4)

八月十五日に、本屋「Book」の辻山良雄さんが、定有堂にお見えになる。全国に「地の塩」の固有の姿を尋ねて、諸国行脚されていると最近知った。この機会に道案内の三砂慶明さんが、大阪から鳥取まで足を運んで「『読書室』読書会」を主宰する。

「日本の『地の塩』をめぐる旅」というシリーズを、スタジオジブリの雑誌『熱風』に、辻山さんは連載している。そこにミッシェンを語る。「自分がいなくなったあとの本の世界のこと、そろそろ気になりはじめている」「わたしたちが、こうした個人の本屋を開いた最後の世代になつてしまふのではないか？」辻山さんは希望も抱いている。「今、全国にあるそれぞれのやり方で本屋を行っている店を見た誰かが、きつとこのルールを同じように先へと延ばしていくでしょう」

辻山さんは八年前に開業している。なすべき事を成し、

見るべきものを見た、という心境なのだろうか？生成変化を求めているのだろうかと思つた。本屋の仕事からいろんな雑事をはぎ落とし、「地の塩」を見いだすところに、祈りのようなものを感じた。

三砂さんは「音信不通」今号に、主宰する「読書室」について語っている。まず「読書室」というのは屋号、つまり名のりだという。

「定年のない自分の仕事をつくりたいと考えてつけた名前です」。加えて「私が誰かに止められても、一生やめないことってなんだろうと考えた時、答えは一つしか見つかりませんでした。それは読書です」三砂さんのユートピアは「本が好きで、読書が好きで人と一緒に本の話ができる場所」なのだ。「読書室」は「地の塩」なのだと思つた。

二十代の終わり頃、わたしもしきりに定年のない自分の仕事に想いを寄せた。いつまでも遊びつづけたいという気持ちだったのかもしれない。結局自営業なら遊びつづけるかと考えた。その頃人に教わり、いまだに気になりつづける実朝の歌がある。「塔を組み堂をつくるも人嘆き 懺悔にまざる功德やはある」。自分では、核心に向かつてささと歩け、と聞こえた。独立自営がこのとき思い浮かんだ。それから四十三年、人は命にいつか迫り越されるという事実を知った。そして三砂さんの「読書」という言葉の核心

性に驚いた。わたしは塔も堂も捨てたと思っていたが、そうではなかった。はぎ落とし後に「読書」が残る、ということを教える三砂さんの一言に、驚きを感じた。

寺山修司の有名な歌がある。「マツチ擦るつかのま海に霧ふかし 身捨つるほどの祖国はありや」。自分の初発衝動は、「身捨つるほどの仕事はありや」だったように思える。本屋は、身捨つるほどの仕事だった、と振り返ることができる。「身捨つるほどの書物はありや」、結局これはなかった。自分が読む本を探すよりも、人に勧める本を探すことの方が楽しかった。

二つの風景を思い出す。一つは「読む会」の創設者濱崎洋三先生が死の半年ほど前から、「もう仏教の本が読めなくなつた」とわたしに言つたことだ。歴史家だったのでそういう文脈だったとは思ふのだが、わたしは単に「本が読めなくなつた」と受け取つた。しかし、ふと今になって気づくことがある。「仏教」の本が読めなくなつただけで、専門の日本史、そして現代思想はどうだったのだろうか？取り返しのつかないことだが、きちんと聞くべきだったと悔やむ。

二つ目は、いろんなところに配達をしていた頃のことだが、野の花診療所（ホスピス）にはよく遊びに行つていたので、病室にも顔を出していた。入院していた男性から

三冊の本の注文をもらった。三日ほどして届けたのだが姿はなかった。亡くなっていたのだ。家族の方がいて、本を読もうとしていたことに驚いていた。

いまわたしは読書をつづけている。「身捨つるほどの書物」はないが、死の床で読みつづける人の事を思い起こすと、本はそのまま「地の塩」だったのだと確信できる。諸国行脚人が経巡った果てに出合う結論は、本がある場所そしてすべての本屋は、人のために役立っている、という再発見だと思う。

三砂さんには『ブラザーサン・シスタームーン』のDVDをプレゼントした。後日、辻山さんみたいだね、と問うたのだが、「音楽がいいですね」とだけ答えた。離れて同時に読み合っている『目的なき人生を生きる』の文末に、「清貧に憧れて、フランチェスコに傾倒した」という一行がある、というのを言い忘れた。

2023.07.21

(参考)

小冊子『熱風』スタジオジブリ

辻山良雄 『小さな声、光る棚』幻冬舎 2021

三砂慶明 『千年の読書』誠文堂新光社 2022

濱崎洋三 『伝えたいこと』定有堂書店 1998
山内志朗 『目的なき人生を生きる』角川新書 2018

定有堂教室 「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

8月22日 火曜日 19時から テキスト カルロ・ロヴェッツリ 『すごい物理学入門』 河出文庫

定有堂教室 「ドウルーズを読む会」

(講師) 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授
8月17日 木曜日 19時から

テキスト『レヴィナス・コレクシオン』ちくま学芸文庫
(「逃走論」)

太極拳教室 (会場 定有堂三階・他二カ所) 葉香クラブ
毎週 水曜 19時半から ・土曜 13時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員
三段 公認B級指導員

定有堂教室 「読書室ビオトープ」

小説を読む会です 19時半から

8月24日木曜日 第4回テキスト『グレート・ギャツビー』

本棚義勇軍

三砂 慶明

(読書室)

名刺をお渡しすると決まって、

「読書室って一体何なんですか？」とたずねられます。

「屋号です」

という返事に納得いただけないときはいつも、

「定年のない自分の仕事をつくりたいと考えてつけた名前です」と答えています。

私が誰かに止められても、一生やめないことって何だろうと考えた時、答えは一つしか見つかりませんでした。それは読書です。これから先、自分がどうやって生きていくのかはわかりませんが、今まで四十年近く続けられたことは、私には読書しかありませんでした。だから、生業にはならないかもしれませんが、自分の一生の仕事として、本の魅力や読書の楽しみを分かちあいたいと願って、「読書室」という屋号で本の紹介をはじめました。

「なるほど、経緯はよくわかりました。で、それはどこでやっているんですか」とたずねられると、

「webとか、書評とか、読書会のイベントとかですかね」と口を濁していたのですが、あるとき定有堂書店の奈

良さんから、

「三砂さん、だったら読書室を実際につくってしまえばいいんじゃないですか？ そうしたら、みんなもう何も聞いてこないですよ」

とアドバイスをいただきました。

読書室は生業ではなく、私の人生の事業なので、事務所を構えるのは難しいとしても、自宅の一部を読書室にすることならできるかもしれない。そう考えはじめた途端、目の前が明るくなりました。

小さいけれど、本が好きで、読書が好きな人と一緒に本の話ができる場所をつくる。考えただけでわくわくします。その上、信じられないことに、奈良さんのご好意で、定有堂書店の本棚の一部を読書室で使わせていただけることになったのです。

私は『千年の読書』を書かせてもらったときも、『本屋という仕事』を編集させてもらったときも、考えたらいつも奈良さんの言葉に導かれて生きてきました。だから、奈良さんに本棚の一部を譲っていただけと聞いたときに、単純に、私はこれから先もきつと一生、本と関わって生きていけるに違いないと信じてことができました。

しかし、問題は一体どうやって鳥取から関西まで本棚を運ぶかです。一番簡単なのは、運送会社にお問い合わせするこ

とですが、折角運ぶなら自分の手で運びたいという思いがありました。

ただし、私にはトラックの運転ができないし、そもそも一人では本棚を運ぶことすらできません。以前、私の家の引越しを手伝ってくれた友人たちはスケジュールがあわず、どうしたものかと途方に促れていたら、人生の大先輩、大学生協書籍部の林さんから、「面白そうなのでやりますよ」とお返事をいただきました。

早速、2tショートのレンタカーを手配すると、Hさんはトラックに本棚を収納した図面を起こしてくれて、本棚を運ぶ順番に加えて、入らない棚がいくつかあるので、持っていく棚の優先順位をあらかじめ決めておくようにと、アドバイスをいただきました。

その上、奈良さんが定有堂の読書会で、本棚義勇軍をつのつてくださり、「読書室ビオトープ」の月森七海さん、浜田浩之さん、上田ビルで「音信不通」を常設配布している設計士の木下裕さんに、奈良さんの講演会会場でご挨拶しただけでもかわらず参加して下さった梶川誠さんに加えて、個人的に尊敬しつつづけている今井書店の高木善祥さんが、集まってくださったのです。

本棚義勇軍の力で、あつという間に本棚は梱包され、どう考えてもこの階段幅を本棚は通らないとの私の予想を裏

切って、本棚を浮かせ、ねじり、斜めにきりかえして（し、かもそれを四回も！）本棚を十五本、トラックに積み込むことができたのです。

「終わった！」

という爽快感とともにトラックに乗り込むと、本棚義勇軍の皆様が満面の笑みとともに、両手をふってくださいました。（しばらく続きます。そして、八月に定有堂で読書会を開催させていただきます。本棚義勇軍の皆様、ぜひよろしく願います）

「読書室」の読書会（三砂慶明さん主宰）

読書会…八月十五日午後七時～八時半ごろ

場所…定有堂書店二階

課題本…『小さな声、光る棚 新刊書店「tine」の日常』

（幻冬舎）

副読本…『書店風雲録』（ちくま文庫）『菊地君の本屋』

（アルメディア）

定員…十名

参加条件…課題本を読んでくださる方をお願いします。

お申し込み…<https://info.dokushoshitsu.com>

（恐れいりますが、返信のメールをもって、参加決定とご理解ください。）

自分の「棚」を眺めると

—本屋さんの「このものの性」

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授）

（「読む会」選書人）

ここ一ヶ月ほど、「棚」がとても気になっている。今までの人生の中で（何と大袈裟な！）、こんなことは一度もなかった。

定有堂書店が四月一八日（火）に「店じまい」してから三ヶ月以上が経った。店舗の面している若桜街道—鳥取駅と鳥取県庁を結ぶかつての目抜き通り—を通ることは、今ではほとんどない。

定有堂書店が開店した一九八〇年から一一年間は鳥取に住んでいなかった。年に数回、立ち寄るだけだった。メインバンクならぬメイン本屋さんとして三二年間もの長きにわたって大変お世話になった。

今でも時折「仕事帰りに寄ってみようかな」と思い立ち、「もうなくなっただ」と閉店を再確認する自分がいる。これから何回、このような思いを抱くのだろうか。五月号に三宅玲子さんが寄せたエッセイのタ

イトルではないが、「本屋のない人生なんて」という喪失感である。

旅先（出張先）では、駅ビルやその周辺の本屋さんには必ず立ち寄ることになっている。当然ながら店それぞれには何かしら特徴がある。その店をその店たらしめている何か、もったいぶって中世哲学の用語を用いると、本屋さんの「このものの性」について、今まで考えたことはなかった。

「本屋本」というジャンルがあるかどうかかわからないが、「店じまい」以前に読んだことがあるのは、すべて定有堂書店が取り上げられていた本だ。列挙すると、胡正則・長岡義幸『物語のある本屋—特化した棚づくり』（アルメディア、一九九四年）、奈良敏行・田中淳一郎『街の本屋はねむらない—現代書店業1』（アルメディア、一九九七年）、石橋毅史『「本屋」は死なない』（新潮社、二〇一一年）、三砂慶明編『本屋という仕事』（世界思想社、二〇二二年）。

今にして思うと、これらの本をきちんと読めば、本屋さんの「このものの性」を決定づける何かに気づいたはずである。しかし、定有堂書店が出ていることがうれしくて、「へえ、有名なんだ。近くにあってありがたいな」という月並みな読後感を抱くだけだった。

「文脈棚」という言葉を初めて聞いたのは、四月一六日（日）のNHK・R「ラジオ深夜便」においてである。辻山良雄さんは定有堂書店の閉店を紹介し、「文脈棚」のゆるやかなテーマに基いた陳列方法」の先駆けのような店だったと高く評価した。

「店じまい」後しばらくして、立て続けに四冊の「本屋本」を読んだ。辻山良雄「本屋」はじめました―新刊書店「Jibb」の冒険（原著二〇一七年、ちくま文庫二〇二〇年）、同「小さな声、光る棚―新刊書店「Jibb」の日常」（幻冬舎、二〇二一年）、永江朗「菊池君の本屋―ヴィレージヴァンガード物語」（アルメディア、一九九四年）、田口久美子「書店風雲録」（原書二〇〇三年、ちくま文庫二〇〇七年）。

そうか、定有堂書店が心地よい空間と感じられたのは、あの「棚」があつたからなのか。これら四冊は「本屋「Jibb」ヴィレージヴァンガード」「元気な頃の「リブ」の「棚」づくりを主題的に論じているわけではない。それでも、「このものの性」に論点が大きく関わっていることは、本屋業界と縁のないド素人の私にも何となくわかる。

いつもの悪い癖で、前置きが長くなった。ここからが本論である。

勤務先の部屋には、幅九〇センチくらい×奥行二〇センチくらい×高さ二〇〇センチくらい（六段）のスチール本棚

が四つ並んでいる。計二四段である。自宅で無秩序に積み上がっていた本の約半分を、数か月かけて運んできた。一五〇〇冊弱だろうか。「棚」の並びは次のような感じだ。

左から一番目（入口側）は上から、デカルト・カント・ヘーゲル、デリダ・メルロ・ポンティ、フッサール・レヴィナス・廣松渉、アーレント、ハーバーマス・ハイデガー・ウェーバー、今村仁司・セン・現象学。左から二番目は、宮本常一、ドゥルーズ・西田幾多郎・和辻哲郎・丸山眞男、フーコー・バルト・ロールズ・倫理学、サルトル、フランクフルト学派・ユダヤ思想、スピノザ・ヴォルテール・日本近代史。右から二番目は、民俗学・柳田国男・戦前日本思想、江戸以降の日本思想、グイトゲンシュタイン・構造主義、鈴木大拙・道元・古代ローマ史、近代日本の植民地主義、マルクス・教育哲学。右から一番目（窓側）は、沖縄・蝦夷（北方世界）・中央アジア・宗教学、経済学、古代中世哲学、現代史・科学論・美学、当事者研究・現代物理学、科学哲学。

チョコちゃん私の「棚」を見たら「ボーっと生きてんじゃねーよ!」と叱るに違いない。皆さんは、自分の「棚」を本屋さんのようにカッコよくするために、どのような工夫を凝らしているのだろうか。

小さきものの大きさ

木元 健二

(新聞記者)

ふいに目が合った。相手はごっついウシガエルである。先夜、ウオーキングをしている時のこと。道ばたの明かりのもとに鎮座していた。

くすんだ色のボディに、ぎよろりとした両眼をのせている。おもむろに、ひとつかみもある背を揺すり、どしんどしんと水辺の方へ弾んでいった。

私はいま、島根・松江で暮らしている。アパートのベランダから松江城を間近にのぞむことができる。城の周りは堀川がめぐらされ、そこから支線のような水路が住宅街のあちこちにつたっている。田んぼも点々とあつて、日暮れからカエルたちの歌が響く。

ンヴオー、ンヴオーというのは、こないだ見つめ合ったウシガエルだろう。姿もよくみれば丸っこくて愛嬌があるが、声はあまりよろしくない。ケロケロツ、ケロケロツとかわいらしいのは、アマガエルだろうか。

カエルは縁起ものという。水の都の夜はやはり、いろんなカエルの声でにぎわう方がいい。水泳少年だった筆者が

通っていた水泳教室のマークも、カエル印だった。

松江城の堀川沿いには、ラフカディオ・ハーン(1850―1904)を顕彰する小泉八雲記念館と、彼の旧邸が並んでいる。

文豪は小さな生き物を愛した。鈴虫や松虫などを飼っていた竹細工の虫かごが残されている。

〈やがて死ぬけしきは見えず蟬の声〉

こうした松尾芭蕉の俳句のように、日本では虫が文芸作品の題材になっていることに、いたく共鳴していたという。「小さな生命体に、筆一本で生きようとする自分の影を重ねていました」

そんな逸話を記念館で聞いた。

「ゲゲゲの鬼太郎」で知られる漫画家水木しげる(1922〜2015)も、幼い頃から虫に興味を抱いていた。自伝的エッセーの『ほんまにオレはアホやろか』(新潮文庫)に、そのわけがつつづられている。

〈大地の神々によって生かされているという、ぼくの漠然とした人生観は、すでに虫によって実践されていると思われたからである。それに虫は、虫ごとに自分の生き方がある。蝶の生き方もあれば、蟻の生き方もある〉

「今、自分が生きている世界だけでなく、別の、もう一つの世界があるというところがおもしろい」

それぞれにしか進まない生き物の歩み。それらが織りなす自然の成り立ちを見つめていると、生来の、天衣無縫な感受性が開放されたのだろう。

どこまでもマイペースな人だったらしい。眠ることを愛し、小学生になっても兄弟が登校する頃になつて起きだし、すっかり朝ごはんを食べて家を出るので出席はいつも2時間目からだった、というエピソードが残る。

陸軍二等兵として出征し、激戦地ラバウルから左腕を失いながらも奇跡的に生還した。末端の兵士として軽んじられ、殴られ続けた。絶望的な戦況のなか、自然とともに暮らす現地の人と心を通わせ、産物を分け与えられ、終戦まで乗り切った。

並の人間には見えぬ妖怪の世界を描きあげ、極めて遅咲きだったが、大輪の花を咲かせた。鬼太郎をはじめとするキャラクターは、知らぬ人は少ない。あの目玉おやじは虫語を話せる、と聞いたことがある。

鳥取市でホスピスケアに取り組んでいる野の花診療所の徳永進さんが、新聞のエッセーにこんなことを書いていた。〈7月2日、カナカナ蟬が里山の方で鳴いた。蟬は一足先

に夏を始めた。10月の初旬まできつと汗だく〉
団塊の世代にして、いまでも診察に往診に、と奔走している徳永さんにとって、この夏の酷暑は歓迎できるものではないだろう。

ただ、私のように転勤族として長年都会で暮らしてきた者にとつて、カナカナ蟬の声は、ひとときわ情緒を感じさせる。

松江でも、彼ら（鳴くのはオスだけらしい）の声が聞こえてくる。とりわけ西方、夕焼けに染まってゆく宍道湖沿いの小山から、カナカナカナカナ……と、だんだん遠ざかっていく響きには一瞬、目をつぶりたくなる。

思えば、蟬の声は前任地の、東京・築地でも聞こえた。銀座にこんなに近い所でも、蟬は鳴くのか。そう感じて街路樹を見上げたこともあった。あれはムイン、ムインとかましい、ミンミン蟬だった。

カナカナ蟬が何かを感じさせるのは、私にとって珍しいからなのか、どうか。そのあたり当たり前のようにカナカナ蟬の声を聞いてきた徳永さんと、語り合ってみたいものである。

ごく限られた時を生ききる蟬の声。その響きは人それぞれの終幕を見据え、支える医師に、どう染み入るのだろう。

本を作る側から (5)

村瀬 謙介 (小取舎)

友人や親族が亡くなると「一年前にはまだ生きていたなあ」とか、「一週間前のこの頃にはまだ生きていたんだ」とかそんなことを考える。亡くなった人は全世界どこを探してもいないことはわかっているのだが、同時に時間とは？ということについてもぼんやりと考えてしまう。

時間は円滑に生活するために必要な目安であり、友人との待ち合わせや仕事の段取り、締切、料理、睡眠、移動、人生設計など、生きていくために必要なものだ。だがふと思う。過去も未来もなく、現在だけがある、いや、現在という時間を表す物もないと考えてしまうことがある。「過去」は記憶であり、「未来」はただの想像。「現在」という時間の概念も本来自然界においてはなく、地表があつて生物がいる、太陽が回っているだけだ。人が亡くなった時にそういう思いが湧き上がる。過去という時間だけにその

人の人生が囚われるのが嫌なのかもしれない。

そういえば時差があるのも変な感じがする。知り合いがイギリスに住んでいるのだが、同じ今なのにこっちは新年、向こうは年末ということもなんか変な感じがする。それは時差があるということに納得しているような感覚に陥る。もう九年前の映画になるのだが、評価の高い『インターステラー』という映画を最近観た。地球の食料が尽きそうなので銀河の先にある別の銀河に行くSFで、主人公が着いた惑星では重力が違うため時間の過ぎ方が違う。その星での数分が地球の時間でいう何年分みたいなの。いわゆる相対性理論が鍵となっていてそこがラストに繋がる良くてきた話だった。

最近買った新書『映画を早送りで観る人たち ファスト映画：ネタバレーコンテンツ消費の現在形』（光文社新書）もなかなか面白かった。最近よく言われるタイパについて書かれた本。タイパとはタイムパフォーマンスの略。タイトル通り、Z世代の多くが映画やドラマを通常速度より一・五倍速く観る、十秒跳ばしで観るといふ現象が起こっ

ており、その理由を様々なコンテンツを例に語っている。興味深いのが、そもそもそういう見方をするように映画やドラマも作っていないという面と、タイパを意識して作られているものもあるという両極の視点を書いている点だ。映画や演劇では、心情を表現することにおいて、「間」と

いう時間は重要である。反対に多くのバラエティ番組では過剰に説明する字幕がついている。近年ではダイニングとキッチンが一体化した間取りも増えたことで料理の支度や夕食後の片付けという生活音があるシチュエーションや、ぼーっと「ながら見」をする時でも内容がわかるように、これでもかというように字幕がついている。説明過多の時代で、あらゆる「答え」が最短・最速・実質無料で手に入ってしまう環境はインターネットが加速させた。実際ネット上では物語のネタバレを躊躇せずに聞いてくる人も多い。おすすめポイントを要約した情報を、何を観るか、読むかの指標とするために欲しているのではなくて、観るよりも内容がわかれば良いというなんとも味気のないコンテンツ消費をしている人が増えてきたように思う。本の世界でもアウトプットについて手っ取り早く要点がわかる書籍も多い。英会話やビジネス書、人付き合いのコツなどを書いた本も多く出版され、しかも売れている。本当に要点のみの、

ページ数の少ない読みやすい軽い本がベストセラーになったりもする。書店でばらばらっとめくって良さそうだなと思い手に取り、他の本を物色する間に「あれ、この本は買わなくても良いかも」と思い直し棚に戻すこともよくある。

経験をせず、要点だけ知りたい。それで満足。知った気になっていて、しかもそれでOKな世の中になりつつある。「無駄は悪、コスパこそ正義」と考えるようだが、そもそも生きていること自体がタイパが悪いという考えもあり、ならば無駄なことをすることが個を形成するのではないかと思う。そして無駄な経験を正当化できるように繋げて生きていくことが面白いんじゃないか。

定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)



汽水のほとりから (29)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

先日、思想家で武道家の内田樹を招いたトークイベント「耕さない文化論」が地元松崎で開催された。氏が松崎を訪れるのは実は二回目である。前回は21年1月のことで、約二年半ぶりである。「コロナ禍が収まったらまた来ます」と言い残して、スーパ―はくと発車に間に合うギリギリの時間まで付き合った末、急いで送迎車に乗り込んで、会場の汽水空港を後にされた氏の姿は脳裏に焼き付いている。スタッフの一員として親しく言葉を交わした私は、笑顔で気さくに応じてくれる氏の人柄に魅了された一人である。結局コロナ禍は二年半経っても収まらず、それでも「また来る」という約束だけはようやく果たされた格好である。

前回は新刊『日本習合論』(ミシマ社)が出たばかりで、それを話題に講演していただいたと記憶するが、講演後の第二部・質疑応答の司会を引き受けた私は、氏の講演の内容にはほとんど触れず、イベント会場の書肆汽水空港のモリテ

ツヤくんや浜村を拠点に活動するパーリー建築こと宮原翔太郎くんなど、近年移住した若い人たちの文化発信のあり方を話題にしようと目論み、内田氏が地方移住／Uターン系雑誌『TURNS』などに寄稿された文章を勝手に抜粋し、レジュメを作って参加者全員に配布した。

さて、今回のテーマ「耕さない文化論」は、右に述べた前回の私の目論見を引き継ぐものと秘かに考えている。なぜなら、今回の第二部のディスカッションでパネリストとして登壇したのは、前回に続いて汽水空港のモリくん、地元松崎で文化度の高い映画を上映するジグシアターの柴田修平くん、公的機関や大学などが主催するイベントのマネージャーを務める野口明生くんの三名で、彼らの仕事は総じて地方からの文化発信のあり方に関わるものだからだ。内田氏はそれを「コモン(共有地)を作る」と評した。文化発信によって人をつなぐ場所を提供しているからだ。

今回の内田氏の講演は、資本主義はいずれ終わるという話から始まった。しかし、それは希望的観測というよりもむしろ破局に向かうという話であり、そうなる前に延命を図ろうとする政治家や官僚やエスタブリッシュメントらによって、先ず地方切り捨てが行われるという話だった。即ち、人口減少対策として、都市部への人口集中によって消費活動を維持し続け、国のGDPを高水準に保つという政策であ

り、韓国では事態が急速に進行しているという。氏によれば、「耕さない文化」とは、こうした経済成長に固執する体制に抵抗し、人口を分散させて地方を維持するという反資本主義的な試みを指すだろうというのである。

地方に生きる我々が抵抗しなければ、いずれ都市部への移住を余儀なくされる。公的機関や教育機関や医療機関が無くなれば、不便で住めないからだ。そして、その前段の話として、本屋や映画館といった文化拠点の問題がある。それらが地方から姿を消して久しい。高度経済成長期は、どの町にもあつたはずのものが、もはや無いのが当たり前になっている。その意味で、松崎という小さな町に汽水空港とジグシアターが存在すること自体が奇跡なのだ。内田氏はディスカッションの中で、パネリスト三人に共通するのは、文化的なパブリック（公共の場）を起ち上げたことであり、私財を投じてコモン（共有地）を作り上げたことだと述べた。それは私有財産が少なくてもかまわないという反資本主義の精神の顕われであり、「耕さない文化」とは、まさにそうした地方文化の発信のあり方を指すとされた。

内田氏の『コモンの再生』（文藝春秋）なども読んだが、今回あらためて氏のコモンに対する考えを聴き、ヒントになることが多かった。それはコモンをどのように維持するかという問題である。氏によれば、コモンは維持できない場合が多

く、持続するには縦軸と横軸が必要だとされる。

縦軸は、先人に贈与された文化遺産を引き継ぐ使命感を持つことだ。それは手を貸してくれないかという天が呼ぶ声に応えることで可能になる。コーリングはその意味で、それが天職の意になる。スピリチュアルだが、だからこそ「今だけ・ここだけ・自分だけ」の資本主義を超えるのだ。

一方、横軸は、コモンを利用する人間のつながりである。内田氏は前回のイベントでモリテツヤくんが「自分の畑のトマトが一晩で全部お腹を空かせた旅人に食べられたら悲しいけど、その戸惑いが大切だと思う」と発言したのに言及し、コモンの維持には節度と抑制が必要だと説いた。無償の贈与だけではコモンは収奪されて終わってしまう。コモンは共同管理するもので、それを維持するには互いに欲望をコントロールする節度と抑制が必要である。思うにそこには互いに支え合う相互扶助の精神も必要であろう。

最近、私は私財を投じて集会所兼私設図書館を作った。方向性は間違っていないと考える。が、それをコモンとして成立立たせるにはどうすればよいか。悩みはそこにある。

人民食堂の夜（上）

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

「大阪日日新聞は7月末をもって休刊」というお知らせが紙面の片隅に載っていた。ついに来たか。だが、予想より20年は長く生き延びた。

昭和の時代、大阪・梅田の地下街の名物といえば「壁新聞」だった。売店そばの壁や柱にベタベタ貼られた夕刊各紙の見出しを見て、帰宅を急ぐサラリーマンたちが買っている。「関西新聞」「新大阪新聞」「大阪新聞」そして「大阪二チ二チ（日日）新聞」。

夕刊紙はスタンド売りが中心で、目立ってナンボ、買われてナンボの世界だから、勢い、見出しはエゲツナイもの、記事も「ホンマでつか」と少々マユツバな内容が多くなる。ヤクザの抗争や政界のスキヤンダル、芸能ゴシップが大半だった。

「甲子園センバツ外野席で公開処刑 山口組の血の襲撃計画『入手』」。なんや、計画だけかいな。

「山口組がグリコ森永特捜班 ワシらが捕まえたる 犯人と間違われ発奮 待て待て『勇み足』」 どうなる警察の立場」 そんなアホなヤクザがどこにおる。

「あーつ、また、だまされてもうた」。見出しだけ見て買ったサラリーマンたちは、帰りの電車の中で毎回ため息をつく破目になるのだが、しかし、その顔は少しも怒っていない。

◇ ◇ ◇

記事の多くは、記者たちが小耳にはさんだ事実を十倍いや、百倍も膨らませ、想像の翼も広げて面白く書き上げた読み物、いわば「創作」に近かった。それでも不思議にクレームは少なかったという。

むしろ読者は「次はどんなけつたいな記事が…」と、だまされる気満々で、それも当たり前、かつて書き手の中には織田作之助、司馬遼太郎（ともに夕刊の大阪新聞出身）といった大作家たちが含まれていた。まだ大阪に活気があり、ゆとりがあった時代の話。

記者時代、私は作家の井上ひさしの「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く」という言葉が好きだった。新聞だから事実を追い求め、伝えるのが使命。だが、それは送り手の側の理屈で、人々が「面白そう」と手に

取ってくれないければ意味がない。

かつてひよんなことから、大阪の夕刊紙の黄金期を担った男たちとかかわりを持った。今やスクープは週刊誌ばかり、淡々と地盤沈下に甘んじている新聞の失われた姿がそこにはないか。彼らのことを書き残そう。上・中・下3回、どうかお付き合いを。



かつて勤めていた新聞社は突然「姫路で新聞を出す」と言い出し、行き詰まると「次は大阪だ」と姫路にいた社員が全員大阪で新聞を作ることになった。

二〇〇〇年八月の終戦記念日の前。「ろくな準備もせず、これでは中国戦線がダメなら南方戦線、という日本軍と同じじゃないか」。会議で意見すると、見せしめのように私も大阪に飛ばされた。九月、ボストンバック一つで大阪に着くと、さつそく十月発刊に向けて忙しくなった。大阪では、買収した夕刊紙を朝刊化するという。

「夕刊から引き継いだ記者クラブの権利や府庁にボックス（専用の記者室）もあるから、姫路と違って苦勞はせん」というのが、われわれの社主の見立てだった。

買収した大阪二チ二チ（日日）新聞は「帝国新聞」として一九一一年創刊。かつての経営陣には、政界のフィクサーやウラ社会に通じた方々がゴロゴロいる。当時のK社長も「関西

のゴルフ王」と呼ばれ、社内には「新聞は道楽だ」という彼の額が掛かっていた。まことに胡散臭い。

それでも買収に踏み切ったのは、K社長が同社主催の花火大会に社主を招待したからだ。「淀川の河川敷に何十万人も集まって、花火大会のパンフは大手企業の広告がずらり。新聞を買ったら、すごい花火大会がおまけで付いてきた。いい買い物をした」。社主は喜色満面だった。



「おたくの社主、だまされてまっせ」。アマガエルをひき漬したような、少し不気味だがどこか愛嬌のある顔の小男が私に近づいてきた。どうせ売るのだから、とK社長は年間の広告全部を花火大会のパンフに注ぎ込んだのだという。男は「松尾八十八（やそはち）」と名乗った。

やがて彼のいる大阪府庁に配属が決まった。府庁の細長い六畳ほどのボックスからは大阪城が間近に見えた。

「僕のこと、松ちゃんと呼んで下さい」「そろそろお昼だな、〴〵人民食堂」でも一緒に行きまひよか。ディーブな大阪の世界に私は迷い込んでいった。（中にく）

読書感想文心得

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

夏が来れば思い出す。

読書感想文は、小・中・高と年二回づつ巡ってくる天災のようなものであった。

そもそも、文字だけの本を読むのが嫌いだったのだ。小学校に上がるまではマンガ一辺倒。故に本を読んで感想を書くんぞ、およそこの世の事とは思えなかった。

小学校では何を読んだかなあ、と思い出してみる。

一年の最初の本は覚えてる。

ディヤングの『びりっかすのこねこ』だ。今でも流通している名作だが、筋も覚えていない。

『サムピッグおおそうどう』は二年の時。『義経記』も読んだ。これは、誕生日に友達がプレゼントしてくれた。しゅい好みだ。

三年はヴェルヌの『八十日間世界一周』だったか、『キユリー夫人』だったか。マリア・スクロドフスカという彼女の本名は未だに覚えている。

四年は『太陽の子と氷の魔女』、「雪の女王」と「ホルスの大冒険」を足したような話だった。確かこの年に学習雑誌に書き下ろされた山中恒の「この船地獄行き」も読んだ。

そして、五年は人類月着陸の年。日下英男の『月へ行くアポロ宇宙船』を読んで夢中になった。フォン・ブラウンに憧れた。

さあ、これ以後が思い出せない。特に、中学の三年間が全く記憶にない。感想文が宿題に出なかったか、さもなければこちらが完全に無視したか、である。

この頃が潮目だったようで、高校に入る頃には、書くことが余り苦痛でなくなっていた。

高一の時に『ポーの一族』で書いた。現国の教師から呼び出しがあり、てっきり再提出を喰らうものと思って出頭したら、感想文コンクールに出したいが、との打診だったので驚いた。嫌がらせじゃなろうか、と疑ったのは当然だろう。他には、三島由紀夫の『午後の曳航』で書いた。ハックスリーの『すばらしき新世界』は実に書きやすい

作品だった。アルトの『ヘリオガバルス』で出したこともあった。さぞ、扱いにくい生徒だったろうな、と思う。

といった辺りで、何となく、感想文のツボというか、教師を黙らせる術というようなものが分かってきた。

【作品選びのコツ】

一 絶対に長編。読むのが楽だからと短編を選ぶとひどい目に逢う。切り口が少なすぎて途方に暮れるのが関の山。

二 娯楽作品は避ける。ミステリやホラーは、読んでいる間は面白いが、いざ感想を書こうとすると「面白かった」以外書くことがない。

三 なるべく社会問題や人生の問題など、深刻で堅苦しいテーマの作品を選ぶ。読むのはしんどいが、取っ掛かりがいくらかでも見つかり、身の丈に合った書き方ができる。

四 裏技だが、絶対誰も読んでいないような作品を選ぶ。相手を煙に巻く方法である。ただし、書き手のセンスと文章力が要求される。

【書き方のコツ】

一 幼稚な書き方はしない。作品を選んだ動機など書く必要はない。いきなり、主張に入ればよい。「ぼく」「わたし」といった主語は入れない。

二 物語の粗筋は必要最小限にとどめ、字数稼ぎと思われなようにする。もしくは全て省略する。教師は当然読んでいて、という前提で書くのが礼儀である。

【主張のコツ】

一 文庫の巻末に付いている解説は参照しない。ネットのコピペも同様。教師は書き手の読解力、文章力を熟知している。身の程超えたパクリはすぐばれる。

二 できるだけ斜に構えて、へそ曲がりな見方をし、誰もこんな読み方をしないだろう、という視点で書く。（たとえば、「羅生門」なら、下人や老婆を礼讃する。『こころ』なら、Kを非難罵倒する）たとえ的外れでも終始一貫していれば「論」として成立する。

三 時系列や起承転結は配慮無用。たかが原稿用紙二枚か三枚。のっけから言いたいことを一枚半くらい書く。構成如何で下手な文章も面白くなる。

いかが？試してみたくなったでしょ。

鳥取あれこれ その八十四

内田 克彦（地域研究家）

（承前）一九二八（昭和三）年の二月号の『婦人』に、「鳥取県の婦人界」の見出しで、次の記事が載る。

鳥取県では過般各郡市の婦人会代表者を集め、町村中婦人会未設置の地には出来るだけ早く設立を奨励して県連合婦人会創設の機運を促し、一方婦人会に適当な御大典記念事業その他一般の社会事業などについて協議した〔以下、略〕

次いで、五月号には次の記事が載る。

鳥取県岩美郡連合婦人会の創立委員会を四月十七日午後一時から鳥取高女で開いたが、その他の郡でも近く連合婦人会が成立するので、その成立を待つて更に県連合婦人会を設立することになった

六月号には、五月二十日の鳥取高女講堂で開催された「第

七回鳥取県連合婦人大会」の記事が載り、午前の代表者会では、「現時叫ばれつゝある婦人参政権問題に対し吾等婦人所見如何」や「選挙権行使の公正を期し且つ政治思想の発達を促すため一般婦人にその思想を涵養する良法如何」などが議事につけられたほか、緊急動議として、「目下山東省において奮闘しつつある我忠勇なる軍隊を慰藉するため大阪朝日新聞社の企てによる慰問袋募集に賛同し県連合婦人会の名をもつて各婦人会とも応募贈呈に尽力すること」を「満場異議なく可決」している。

一九二八（昭和三）年は「御大典」のため、全関西の大会は見送られ、「第一〇回全関西婦人連合大会」は翌年四月に開催されて、鳥取県連合婦人会からは一二名出席している。また、同月下旬には、「第八回鳥取県連合婦人大会」を倉吉市で開催している。

一九二九（昭和四）年八月に、「わが国現下の経済難に直面して、よくこの難局を打開して甦生するには、一に緊縮節約によるのほかな」いため、「わが国において、婦人が国務大臣から直接に呼びかけられたのは、今回が最初」である「消費経済講演会」を全関西主催、大阪朝日新聞社後援により「大阪朝日新聞社内朝日会館」で開催し、九月にはその第二弾として「全日本婦人経済大会」を開催す

る。鳥取県からの出席者に、平井久子、内藤窓子、高橋さく、高木ひさ、中尾乃武子、山田輝子、中井清子の名が写真入りで挙がつている。

この会の内容については、『婦人』一〇月号に詳しく載せている。恩田和子の「開会の辞」は次の通り。

経済上におけるわれ／＼婦人の使命と自覚と責任を省み、家庭のため国家のため今後毎年来会されて（略）政府におかせられましても私ども婦人の経済上の立場を御理解あり私共の力を最もよく活用されるやうに御指導と、御援助と御利用とを皆様と共に御願ひしたい

議案の全部が議了された後、市川房枝、河崎夏子ら一一名連名で緊急動議として、決議文を朗読して次の通り賛成を求めた。

政治を離れて経済の論議は画竜点睛を欠くものである。此意味において、婦人の公民権、参政権獲得をその筋に建議したい。我らの本大会に参加したる意味も、政治と密接の関係ある此の事を是非一緒に考へてほしいと願ひしたために参加したのである。

それに対して、大阪の中村久栄が、

東京の提案には勿論賛成であるけれども、吾れらは今大臣に呼びかけられ大きい日本の台所をまかせられてゐる。これを巧くやりおほせたならばひとりでに公民権、参政権のことも解決されると思ふ。

と叫んで降壇すると、大勢はそれに傾いたのを見て、座長は「東京の緊急動議は打ち切る旨を宣告し」た。角秋勝治『鐘は既に鳴れり 下』には、次の記述があるが、この部分は勿論全くのフィクションである。

「碧川」かたも手を挙げ、運動方針の修正を求めた。「大臣に頼まれたとはいへ、これは明らかに危険な方向です。台所の合理化と言つても、結局は戦争資金を捻出する方便ではありませんか」

会場はどよめいた。国家の要請を批判するのかと、敵意も露わに睨む会員もいる。婦人会の行方を懸念する二人は、周囲の反感を浴びながら叫んだ。

（以下、続く）

二〇二三・七・二二

定有堂書店のない鳥取で

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

七月、最近になって、本屋が近くにないことで、心に大きな穴が開いたように思えてきた。

定有堂書店がなくなったのは、この四月のことだった。

二〇一九年、鳥取に来た時にまず立ち寄ったのが、定有堂だった。

東京に住んでいた頃、私は池袋まで数駅というところで暮らしていた。池袋には、かつてのリブロ（現在は三省堂書店）、ジュンク堂書店という大型書店があった。中高生の頃から、家族で行って、それぞれ一、二時間くらい時間を潰せる場所でもあった。毎週末四階の人文書コーナーを中心に、ほぼ全フロアを眺めるような生活をしていたせいで、「本屋がないと暮らせない」と信じ切っていた。

そんな私にとって、通える書店、人文書が売られている書店があるかどうかは、死活問題だった。そして、一周しながら、この本屋があれば、鳥取で過ごせそうだと安心し

た。そのまま、定有堂書店が出したという『伝えたいこと』を購入し、試験会場にバスで向かった。

移住した二〇二〇年、コロナ禍の中でも続く「読む会」という定有堂の読書会に参加した。

定有堂に通う中で私が初めて体験したのは、店主である奈良さんに「話しかけられる」ことだった。今までの書店での経験は、店員さんに探している本を見つけられない時に頼るくらいで、まさか本屋さんに「こんな本どうです？」と服でも薦められるかのように話しかけられるとは思っていなかった。けれど、自分では手に取ったことがなかった本を薦められるので、「本は積むもの」と心得ている私は、簡単に本を買ってしまう日々だった。

そして、夏に「書いてみませんか？」と言われて始めたのがこの『音信不通』の原稿だった。結果的に私には会ったこともない人が、この街で冊子を手に取って文章を読んでいる。私の書いた物を通してのみ、私を知っている人がこの鳥取にいる。知らぬ間に、鳥取の中につながり出したひとつのきっかけだった。

そう考えると、本を通して人と関わる面白さを知ったのは、鳥取に来てからだった。それまでの私にとって、本を読むのは孤独な営みであって、誰かと共有することもな

かった。加えて、自分が読んでいる本がいわゆる小説や自己啓発書ではなく、人文書であり、わかりやすい本好きではないという自覚があつて、隠していたところがあつた。

「いや、あんたそんな特別じゃないから」と一刀両断するのは、私の弟である。一理ある。私と同じような本好きは、探せばいる。私は、本を買いすぎてしまう一読者にすぎないのだから。

通っていた本屋がなくなった。それでも、今やネット通販もあれば、書店が全て消えたわけでもないのだから、何とかやっていけるとも思う。一方で、本屋を失つて、偶然の出会いがなくなってしまったと確信している。果たしてどうやって本と出会うか、私は今試行錯誤している。

今年になって、私は職場で「司書教諭」になった。つまり、本を差し出す側になった。しかし、自分自身もどう本と出会うべきか考える中で、子ども達にどのような本に出会ってもらうかを考えていくのはより難しく感じる。鳥取では、車で移動できない中高生にとって、書店は縁遠い存在でもある。学校図書館で本と出会うことは、本屋が身近にある地域に比べて、ますます重要になっていくだろう。

本屋のない地域、本へのアクセスという問題。東京に住

んでいた頃の私にとっては、どこか遠い場所の出来事だった。けれど、本屋を通して、少しずつ鳥取という街につながっていた私にとっては、身近な問題になった。

鳥取に来なければ、定有堂書店の店じまいは縁遠いままだった。そう考えると、最後の数年間定有堂書店のある鳥取で過ごすことができたのは、幸運だったかもしれない。

「人生、二十八歳くらいで変わる人が多いですよね。」と奈良さんに話しかけられたことを思い出す。

二〇二三年、一月に私はその年になった。そして、この冬、潰瘍性大腸炎という病気になったために、薬を飲む生活が始まった。今は、副作用から直射日光を避けるようにとも言われ、紫外線、食事、さまざまなことが気になるようになった。傍目には症状が治まった私も、いつか再燃する可能性とともに生きていく。改めて厄介であると実感するが、いまいち理解してもらえない気もする。恐らく、一患者なら誰でも思うことだろう。

順調に鳥取での仕事に復帰していく。けれど、それはかつてと同じ風景ではない。自分の数少ないできることの中で、私には何ができるのか。私はどう生きていくのか。そんなことを思いながら、積まれた本を眺めている。

甘くて冷たくてつるつるしたものが食べたい

あきの素生

(くうねるめがね)



「甘くて冷たくてつるつるしたものが食べたい」

梅雨が明けたとたんにやつて来た猛暑に辟易している。朝、玄關を開けた瞬間から、想像以上に暑い。本気の暑さだ。気持ちのいい青空が、ほんの少しだけ憎らしい。例年、夏バテにはほとんど縁がなく、食欲が落ちないので却って蓄えが増えるくらいだが、今年はさすがに体のだるさや頭痛を覚えることがある。気を付けないとな、と、塩分タブレットを舐めながら、ぼんやりした頭で考える。

コーヒーゼリーが好きだ。ミルクたっぷり甘いミルクコーヒーしか飲めなかった子どもの頃から、コーヒーゼリーは好きだった。茶色く透ける黒いゼリーの上にコーヒーフレッシュをかけて、白くこっくりとして見える薄いクリームがでけるところも気に入っていた。その様子がいかにもおいしそうで、崩してしまうのがほんの少しためられるのだが、食べたい気持ちが優って、クリームにスプーンを差し入れる。クリームがゼリーの隙間に流れ込む。最

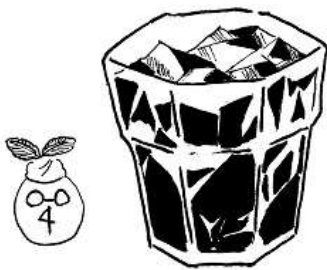
初のひとすくいは、コーヒーの黒とクリームの白との対比がまだはつきりとしている。口の中に入れると、見た目そのままに、コーヒーとクリームの味がそれぞれしっかりと感じられる。苦さとまろやかさのバランスはひと噛みごとにまちまちで、その不揃いな味わいこそが、コーヒーゼリーの魅力だと思う。

コーヒーゼリーは、家で簡単に作ることができる。のだが、そのことに気づくまでにかなり時間がかかった。わが家の粉ゼラチンは、主に牛乳ゼリーを作るためにあった。寒天を使わないのに、「牛乳かん」と呼んでいた。賞味期限の迫ってきた牛乳は、しっかりと火を通し、砂糖と粉ゼラチンとバナラエッセンスを入れて、「牛乳かん」として消費された。ちなみに、「牛乳かん」も好きだ。冷蔵庫の中で、条件を満たした牛乳を見つけたら、大喜びで母に報告と提案をした。「牛乳古くなりよる。牛乳かんにしよう!」わが家で使う粉ゼラチンの箱には、商品を使ったレシピを載せた小さなリーフレットが入っている。そこには大抵コーヒーゼリーも載っているのだが、子どもの頃は、他に「レモンムース」とか「いちごのパバロア」とか「キャロットゼリー」とか、カラフルなスイーツが紹介されていて、大抵そちらに目移りしてしまう。ムースやパバロアは懂れ

のお菓子だった。材料を揃えて、実際に挑戦してみたこともある。一回作ると満足して、やっぱり「牛乳かん」に戻るのだが。

粉ゼラチンで作るスイーツとしては、プリンもある。もちろん、プリンも好きだ。体調が悪くなったとき、食べたくなるもののひとつだし、プリンアラモードは見かけると必ず買いたくなる（頑張つて我慢することもある）とつておきのスイーツだ。ただ、手作りプリンは、ゼラチンを使つて冷やして固めるものより、焼きプリンが好きだ。一時期、家にあるもので作れるスイーツづくりにはまっていた、そのときに焼きプリンをよく作っていた。茶碗蒸しの要領で、バニラエッセンスで香りをつけた甘い卵液を器に入れ、オーブンで焼く。一番難しかったのはカラメルソースを作ること。砂糖と少量の水をカラメル色になるまで煮詰めるのだと思い込んでいて、長いこと失敗カラメルソースの焼きプリンを作っていた。砂糖だけを火にかけて、カラメル色になつてから水でのばすのだとわかつたのは、スイーツづくりブームが去ろうとしていた頃だった。それがわかつたから、気が済んだのかもしれない。愛用していた小さなミルクパンに、カラメル色とほんの少しの甘い香りが染みついたのが、何とはなしにうれしかった。

一人暮らしをして、実家にいた頃と比べて牛乳を買わなくなつた。「牛乳かん」を作ることも、お菓子自体を手作りすることもめつきり少なくなつた。それでもあるとき、何か甘いものを作りたいくなつた。疲れていたのか面倒だったのか、家から出たくないのにスイーツを食べたくなつたのだ。そのとき作つたのがコーヒージェリー。インスタントコーヒーと砂糖と水はいつも家にあるし、なぜだか粉ゼラチンは常備しているから、いつでもコーヒージェリーを食べることができんだなあとわかつて、またうれしくなつた。以来、コーヒージェリーを作っていない。家から出すに甘くて冷たくてつるつるしたものを食べたくなつたときのために、大事にとつておく。



（イラスト・あきの素生）

先生のツラ



ドラメリア (座敷わらし)

太極拳を教えている。ので、教室内で指導する立場にあるのは確か。しかし変わらず弟子の身でもあるので、自身が「先生」という意識はあまりない。そんなわたしが最高に先生面をした、ある日の話。

先日、救急車に乗った。搬送される側ではなく、付き添う側として。太極拳教室の参加者が意識不明になり、一一九番通報する事態になったのだ(大事なかつた今だからこんな風に言えるが、それはもう大変な騒ぎだった)。

緊迫した車内でわたしは少し困っていた。急病人との関係はどう説明したものか。「ご家族ですか」と何度も訊かれ、そのたびに否定を繰り返していた。たしかに付き添って救急車に乗り込み、個人情報報をさらさら書き、かかりつけの病院まで答えるわたしは大変に身内っぽい。その場にいる人の中で最も近い間柄であるのもたしかだ。しかし、こういった緊急時に医療処置への同意ができる立場の人間ではない。

一緒に乗っては来たものの傍から見ると変だよなあ。そう思いながらストレッチャーの後ろをついて救急センターへたどり着くと、わたしのいでたちを見た若い看護師が呼びかけてきた。

「あ、太極拳の先生の方ですね!」

「!.....そうです!」

あまりにもしつくり来る単語に思わず即答。そうか、先生。それならこの場においてもおかしくない。それでいこう。その後のわたしは、徹頭徹尾、「教室の生徒が倒れて責任者として付き添う指導者」として振る舞い、てきぱきと質問に答えた。なので、あの大病院の一部の人々は、わたしを太極拳の先生だと思っている。.....別に完全に間違っているわけではないのだが、あんまり猛烈に先生面をした記憶のせいで、なんだか妙なきまり悪さがある。

・編集後記:

土曜の丑の日にうなぎをいただきました。年に一度のご馳走。学生の頃は北大路通沿いの魚屋さんでう巻きを買ったのが、たまの贅沢でした。

ドラメリア (編集長)

歸山健一さんから『市民が育む持続可能な地域作り』同時代社を寄贈いただきました。「廃校に誕生した『奥多摩ブックフィールド』の物語」(どむか) 所収。

奈良敏行 (発行人)